

多種多様な小さなSOS、住民同士が助け合い 高齢化進む住宅団地、「ささえあい活動」で守る平穏な日々

2025年12月5日 13時56分 (12月8日 11時01分更新)

【連載】ともに暮らせば ひとり老後の未来 住宅団地の「ささえあい」編

年を取っても1人暮らしになっても、居心地の良い自分の家に住み続けたい。そう願いながら、生活の不便さや孤独への不安から、離れることを選ぶ人もいる。「愛着のある町をついのすみかにしたい」。入居開始から半世紀余りたった住宅団地で、住民が支え合って暮らしを取り組むを2回に分けて紹介する。

「ささえあいの家」でストーブの点検をする平田さん（右）と談笑する清水さん



名古屋市や岐阜市のベッドタウン、岐阜県各務原市。国宝犬山城を望む丘陵地の八木山地区には、約2千軒の一戸建て住宅が立ち並ぶ。1970年代に入居が始まり、ファミリー層が続々とマイホームを建てた。それから50年以上が過ぎ、今は住民の約半数が65歳以上の高齢者になった。



清水さんは景色や空気の良さが気に入り、20年ほど前に移り住んだ。ところがある日、近所の女性から「坂が多くて老後が大変だから、元気なうちに引っ越した方がいい」と言われ、ショックを受けた。自身も夫に先立たれ、今は1人暮らし。老いに不安がないわけではない。「でも、大変なことを解決できれば住み続けられるのでは」。そう思い2014年春、ささえあい活動を立ち上げた。

日常生活の中で困り事を抱えた住民が、ささえあいの家に電話をするか、直接訪れて相談。清水さんらコーディネーターが、登録する有償ボランティアのメンバーに声をかけ、日時を打ち合わせて出向いてもらう。作業が完了したら謝礼を受け取る。

始めてみると、依頼内容は多種多様だった。買い物や通院への付き添い、電球の交換、庭の草取り、囲碁将棋の相手…。行政や介護保険のサービスでも行き届かない、小さなSOSが多くを占めた。裏を返せば、ほんの少しの手助けがあれば1人でも暮らせるのだと、清水さんは確信した。

ボランティアのメンバーは、近隣に住む元会社員や専業主婦ら150人ほど。得意なことも苦手なことも、手伝ったり手伝ってもらったりして、お互いさま。「できる人が、できる時に、できることを」が合言葉になった。

当初は無償で引き受けてもらっていたが、お礼の品を持ってきたりお金を包んだりする人もいたため、1時間千円前後の有償にした。運営費を差し引いて、数百円がボランティアの手に。「気兼ねせず頼める」「励みになる」と双方に好評だ。24年度は延べ約600人が利用するほど地域に浸透した。

住宅地の一角にある「ささえあいの家」



記者が11月中旬、ささえあいの家を訪ねると、地域の高齢者宅から集められたストーブが並んでいた。本格的な寒さを前に、メンバーの一人で、ヘリコプターの整備士だった平田俊一さん（76）が一つ一つ点検している最中だった。

平田さんがこの地に引っ越してきたのは38歳の時。「活気があって子どもがたくさんいた時代」。1人息子は独立して家庭を持ち、今は妻と2人暮らしだ。毎日のようにささえあいの家に来ては、依頼のあった家電の修理や包丁研ぎを引き受けている。

記者が「もし、ささえあい活動がなかったら？」と尋ねると、「朝から酒を飲んでいたかもね。ありがとう、ありがとうと何度も言ってもらえて、悪い気持ちにはならんよ」とほほ笑んだ。

ニュータウン、高齢化が顕著 外出しにくさも課題

こつした任毛団地は多くが丘陵地に開発されたため、高低差があり移動に負担がかかる。商業地域と分離され、買い物などの外出が不便になっていることも住み続ける上での課題だ。愛知県春日井市の「高蔵寺ニュータウン」では、住民でつくるNPO法人がゴルフカートでの移動サービスを実施するなど課題解決に向けた事例も。同省の担当者は「本来は静かで住みやすいようにつくられた地域。魅力を感じて、住み継がれるような取り組みが求められている」と話す。

（中根真依）